現代文化と生物の多様性を考える

敷田麻実
北陸先端科学技術大学院大学

確かに私たちの社会は豊かになった。生態系サービスという自然の恵みを十分に享受し、抗生物質の使用や衛生状態の改善で人口が増えた。増えたばかりか、恵みを過剰摂取できるようになり、今や76億人の世界人口のうち、約5億人が肥満だと推定されている。それを現代の病苦と捉えるのか、多少の行き過ぎと考えるのかは別として、私たちは、飢餓から解き放たれ「豊かな社会」を創り出してきた。その象徴は、やはり都市であろう。

その都市に住めば、生態系を含む自然環境を調整できるようにみえる。例えば、オランダは国土の25％が海面下にあり、約8000平方キロメートルの土地を干拓で造成した。世界は神が造り、オランダはオランダ人が造った、といわれる所以である。高度な水管理技術により、美しく、人工的な国土が保たれている。しかし、人工的なものばかりが目を惹く中で、映画「あたらしい野生の地～リワイルディング」の撮影が行われたアムステルダム近くのオーストファールテルスプレッセン自然公園では、干拓地で回復した生態系や野生生物に注目が集まっている。

一方、国内の世論調査では、生物多様性という言葉を国民の52％が聞いたことがないという。日本の都市人口は約80％だが、都市生活では、「自然」を都市公園か屋上緑化でしか体験できない。そして都市に住む私たちが生物多様性を意識するときには、どうしても田舎に代表される、人口の少ない里山地域を思い浮かべてしまう。

その際に連想するのが伝統文化である。私たちの祖先が歴史的に工夫してきた結果として、里山の生態系とともに賛美される。しかし、もともと「生存」を目的としてきた私たちは、伝統文化を創るために生態系サービスを入手しようとしたわけではないだろう。ノスタルジックな思いを抱くことは自由だが、供給サービスや調整サービスを得る際に、たまたま文化が醸成されたのかもしれない。それはちょうど狩猟のための弓矢が、その機能的な利用だけではなく、模様や細工がされて伝統工芸となるようなものだ。

そして、供給サービスを効率的に得るために、私たちは農業や野生動物の家畜化を進めた。ブタやイヌなどの家畜化は約1万年前だといわれているが、供給サービスを効率よく手にすることができるようになった。もちろん自然環境との関わりをベースに営まれていた農林漁業からは、郷土芸能などの文化が生み出されていた。しかし、文化は生産性の向上に寄与しないので、より効果的な生産が目指された。結果的に、それが自然環境の破壊や資源枯渇につながり、「過剰利用による第1の危機」に直面した。

さらに現代は、グローバル化した物流によって、身近な生態系から供給サービスを手に入れる必要を失った。当然その担い手も消失し、国内に45万ヘクタールあるという過疎地域の耕作放棄地では、地域の自然環境の「過少利用による第2の危機」に至っている。

こうした問題に対処しようと、農村のイメージから価値を生み出すグリーンツーリズムのような農業体験が里山地域で試みられ、農業生産の回復と地域活性化を目指した。それは、まだ本体の生産が残っているうちに、生態系との関係を文化によって再生しようとする試みのように思

写真1　映画村の景観としての作物

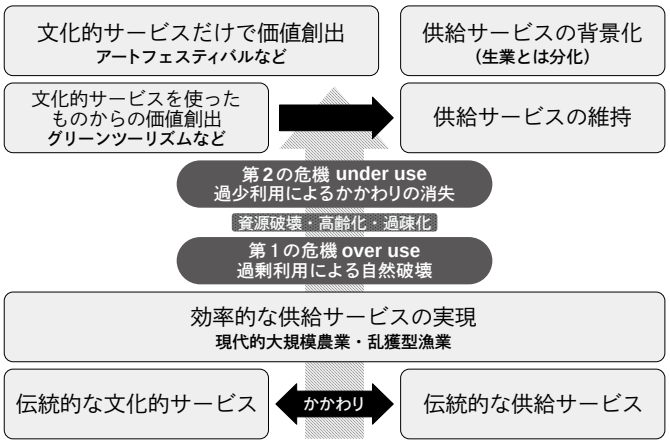

図1　供給サービスと文化的サービスの関係の変化

＊注　図1は新広昭・敷田麻実「自治体における生物多様性と文化多様性をつなぐ政策デザインのためのモデル構築」『環境情報科学論文集』（印刷中）から転載し、著者が改変。

える。

さらに近年では、里山でのアートフェスティバルのような、生産や生業による生態系との関わりがほとんどなく、文化創造のために生態系を利用することも行われている。例えば、小豆島の映画村では、昔の村落の様子を再現するために野菜が栽培されている（写真1）。景観を造るための作物「景観作物」ではないか。そこには多様な生物は必要ない。

また、今や野生生物を保護区で見るのはあたり前で、スマホを通して見ることさえ普通である。ここでは、保護した上に機械を通すのが、私たちの野生生物とのつき合いであり、文化になっている。私たちと野生生物の間には保護区と動画サイトという2つのシステムが挟まっている。もちろん、本物以外には価値がないというのではない。野生生物との関わりから形成された文化である鳥獣戯画や妖怪のように、実物ではなくても高い価値を持つ優れた文化も多いからだ。

このような関係を説明したのが図1である。以前の農業などの伝統的な供給サービスを得る関わりの中で生まれた文化的サービスから、文化的サービスを楽しむために必要な背景として生態系や生物多様性を使うようになるステップを示している。上位の利用では、文化だけが手に入れば十分と私たちは思っていないだろうか。

そのことを批判したいのではない。しかし、それを生態系と私たちのつき合いの高度化と言ってしまうこともできない。これからの課題は、現代社会、特に都市生活を前提にした社会で、文化を創造しつつ、豊かな生物と文化の多様性をどのように維持できるかである。伝統的な文化の生成や維持にそのヒントがあるかも知れないが、一方で、生態系や生物多様性と関わりから、新たな文化をつくる工夫も必要ではないか。

この特集では現代文化と生態系や生物多様性の関係を取り上げた。私たちは生態系に影響を与えたが、生態系も自らを変化させ、その影響に対応してきた。相互作用を前提として、双方が対応し続けていることが、生態系と文化の多様性を生み出していると考えたい。

敷田麻実
しきだ あさみ

北陸先端科学技術大学院大学教授。高知大学農学部卒業後、石川県庁に勤務、その間、豪州ジェイムズクック大学大学院留学、金沢大学大学院修了。1998年に石川県を退職、金沢工業大学教授を経て、2007年から北海道大学観光学高等研究センター教授。2016年から現職。野生生物保護学会会長（2005-2011年）。専門は観光資源論と地域マネジメント。「地域からのエコツーリズム」「観光の地域プランディング」ほか論文多数。